

設計基礎 A2

即日課題『美しく高い塔、自分たちが考え出した塔。』

[担当教職員]

大谷弘明 (客員教授 / 日建設計 CDO 常務執行役員、チーフデザインオフィサー)

後藤沙羅 (助教)

[Teaching Assistant]

大内崇弘 (A72) 田中慶人 (A72) 徳山さき (A72)

■課題概要

建築とはオブジェではありません。見るものではなく使うもの、体験するものです。人間を取り巻くすべてが建築といっても過言ではありません。みなさんは今後、未知の空間体験をたくさんしていくはずですよ。

今日は、みなさんと建築をつくるとはどういうことなのか、一緒に考えたいと思います。考えるといっても頭で考えるものではありません。手を動かしながら考えます。建築とはこれらの思考と試行の果実なのです。

みなさんの頭の中にある塔のイメージをもとに実際の立体を造形しましょう。夢に出てくるような美しい塔、これをチームの力でつくってください。考えながら形にし、実際に組み上げ、出来上がりを他チームと比べ、感じて、批評しあう、これらのプロセスそのものが、建築設計です。これらの活動すべてが建築的な原体験となります。

- ・日時 10月18日(金) 3、4限 (13:20 ~ 16:40)
- ・場所 百年記念館 六甲ホール・ホワイエ
- ・時間配分 各自の作業場確保 13:00 ~ 13:20 @ ホワイエ
事前説明 13:20 ~ 13:25 @ ホール
制作 13:25 ~ 15:55 @ ホワイエ
作品の移動 15:55 ~ 16:00 to ホール
講評 16:00 ~ 16:30 @ ホール
清掃 16:30 ~ 16:40

- ・材料 A3 ケント紙 20枚
- ・持ち物 定規、はさみ (カッターは不可)、テープ、ホッチキス、作品を持ち帰るための袋、床に敷くビニールシートや段ボール、マットの類、床での作業用の動きやすく汚れても平気な服装

* 課題当日までにチームとなったメンバーで集まり、ブレインストーミングを行いましょう。ここが肝心。他のチームをどのように出し抜くかの戦略を練らなければなりません。

* 出来るだけ大きく高くつくりましょう。

* ケント紙は20枚全部を使い切り、余らせてはいけません。

* ケント紙の材料特性をよく理解し、効率的な作業時間と構造的な安定性の確保を同時に達成しましょう。

* 出来上がった塔は、より大きく見えるように下から見上げて撮影しましょう。できれば自然光のもとで。



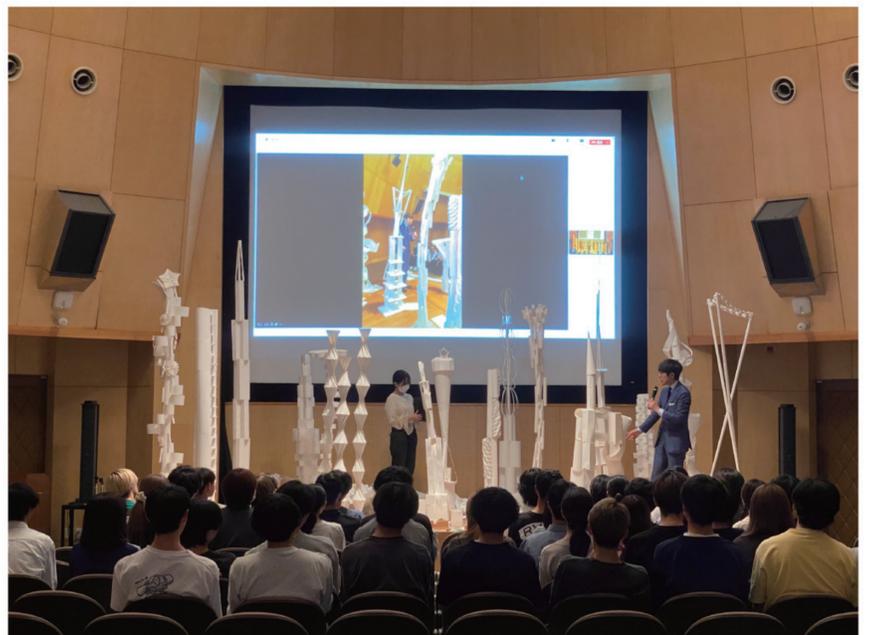
作品制作風景

■大谷先生コメント

グループによる製作に切り替えて2年目、その成果がはっきり表れた。百年記念館のホール舞台に様々な工夫を凝らした、高さ、意匠ともに多彩な「塔」たちが20ほど立ち上がり、正直言って去年以上に壮観だった。この日の体験は皆さんの原体験となるとうれしい。建築学科を志望して入学された皆さんに「小さい時からものづくりは得意でしたか」と質問して誰も手を挙げなかったので一瞬心配になったが杞憂だった。童心に帰ることのできる喜びをまず感じてくれたと思う。

当日の1週間前にお題とグループ分けを発表したのは、話し合いと「作戦」を立てる時間を与えるためであった。できるだけ高く、もしくは美しく、というテーマを実現するには、ケント紙の特性の理解(硬さ、しなやかさ、どのくらいのアールなら曲げやすいか)、加工の工数を減らして強度を保つ方法、つまり「楽しんで得する」作戦、などをよく考える必要がある。幸いにいくつかのグループで入念な下準備をおこなったことが成果から見て取れた。一方、立体特殊曲げを見つけたチームも、その加工のむずかしさが製作時間全体へおよぼす完成度への影響まで考えることは難しかったようだ。

製作中の各グループの動向を観察(諜報活動)するように各チームに助言した。同じようなアイデアに向けて走らない。いかにして抜け出るか(抜け駆けするか)、同じ時間と同じ材料で、どのように他と違うオリジナリティを生み出すか。競争という言葉に悪い響きを感じるかもしれないが、選りすぐりのアイデアを引き出すために、競争=コンペは避けて通れない。これが建築世界の現実である。実際敷地は一つしかないから、複数案を同時に建設できない。この日のこの課題で、これらのことを同時に一気に体験してもらうことが出来た。



大谷先生の作品講評